

重度精神薄弱児への人間学的接近(第2報)

——“私の内なる障害児”への志向——

村上 英 治

人間が何であるか、そして何になるのかということ、人間が何を実現しようのかということは、決して彼が生命的に現にあるという事実の中には含まれていないで、彼がこの事実に対してかかわりを持ちながら、この事実から何を作り出すかということの中に含まれている。

(ピンスワンガー)

昨年夏、私たちは、愛知県心身障害者コロニー、はるひ台学園において、重度精神薄弱児たちとのとりくみという、まことに得がたい貴重な体験を得た。子どもたちとのとりくみを、外がわかからの接近という次元を抜けて、私たちと共に生きる人間存在として、彼らが現に生きているという事実そのものに深い関心をよせながら、この子らとのかわりを深めていこうとしたささやかな体験の記録をとおして、私たちは重度精神薄弱児⁽¹⁾に対しての眼が新しく開かれてきたことを、仲間のすべてがすべて、そのとき実感としてうけとめてきた。この種のかかわりの深まりと拡がりのみが、彼らの人間存在の根源的なすがたをあらわにしていく接近方式であるとして、私たちの重度精神薄弱児に対する人間学的接近の意図をここに位置づけていこうとしたのである。

ことした、これらの意図をさらに展開せしめるために、私たちは、はるひ台学園重度棟にやってきた。昨年わずか5日間といった短期間にすぎなかったにしろ、そのかかわりの体験で得られた私たちの成長が、1年という期間を経て、ふたたび同じ対象児とかかわろうとするとき、私たちの中にどのような変化が生ずるのか、かかわった相手方である子ども自身、またこの1年間、どう動き、どう変化し、どう成長してきたといえるのか、さらにそれが私たちのかかわりといった関係枠の中でどのような意味をもちうるのか、ひとつのねらいはここにあった。これについては次の機会にまとめられる。今ひとつ、昨年のこうした体験の記録に目をおしたり、あるいは昨年のかかわり手から、直接さまざまな情報を得たりすることによって、かなりの予備知識にもとづく構えはあったにしても、およそこれまで、コロニーを訪れたこともなければ、こうした精神薄弱児、しかも重度の、さらに重症の障害児たちとどう体験を、今までまった

くといってよいほどもつことのなかった、その意味での私たちの新しい仲間が、昨年からの仲間が昨年であり経験したのと同様の経験を、積み重ねていくことにも、ふたたびこの年ここへやってきた意味があるともいえる。

しかしながら、昨年展開の視点として提起された問題はいぜんとして残されている。5日間にすぎない体験から、多くの何を語ることができるであろうか。それはどこまでも単なるひとりびとりの体験の羅列的な提示にとどまってしまうだろうし、しかもそれはいぜん皮相な水準での体験記録にすぎないのかもしれない。しかし本来この実習へ参加すること自体のねらいは、むしろそこにあったといってもよい。ともかく、これらの子どもたちとやみくもにとりくむこと、そしてそのようにしてとりくんできた私たちの仲間ひとりびとりの中に、ある種の意識態度の変容がおこるであろうことを期待すること、実際に結果としてはそれがおこることもあれば、おこらないままにとどまることもあり得よう。それをそれだけで意味をもつと考えるのは、まさしくこの実習の主眼が、かかわりの内容を問題にしているのではなく、いわばかかわりの体験をこのようにして体験することそれ自体に意味があるとの観点に立つからにほかならない。

私たちの新しい仲間は、昨年からの仲間がそうであったのと同じく、しかし、ここでまた明らかに、それぞれのかかわりの構え、またかかわった子どものありかたに応じて、具体的な様態は異なりながらも、それぞれに、みづからもおどろく、自己の変革を明確に意識するのである。子どもの側の変容という点で期待することには、昨年も考察した如くこの短期間のかかわりでは多くの無理がある。しかし、この種のかかわりの体験をとおして、かかわり手の側の構えは、明らかに外がわかからの

次元を越えて、内なるものとしてのかかわりを志向する。障害児とは何か、精神薄弱児とは何かを外から模索する眼は、それを契機に、“私の内なる障害児”を我と我が身にみづからの課題として問いかけていこうとする方法論の上での転換を要請する。この子たち自身が生命的に現にいかんか生きていくかの探索ではない。この子たちが現に生きていくという事実の中で、それとかかわりながらそこから何を作り出すかに眼を向け、問いかける視点がここに生まれてくる。

“私の外なる障害児”から“私の内なる障害児”へと、この小論の意図するところ、こうして新しく参加した私たちの仲間の、それこそまたなまなましい、印象体験そのものの記録にもとづいて、重度精神薄弱児へのかかわりが、障害児全般に対して抱いていたかかわり手の既成の観念に、また最初のであいにおける率直な印象体験にいかんか影響を与えていったのか、その変容の過程をたずねることにある。その体験の変容をとおして、私たちと同様、障害児ひとりひとりがすべて価値実現の可能性をもつ人間存在として、たとえその社会的実用主義の面からの有用性は乏しくとも、その自己実現をめざして歩む生そのものは無限に尊重されなければならないことを、私たちが、はらの底からの実感としてうけとめられるようになったとき、この子たちに接近しようとする私たちの意味も根底から変わってくる。そしてそれこそ、かかわり手の側の大きな質的転換を伴った成長そのものであり、その成長が、それとかかわる障害児の真の意味での発達を、まぎれもなく促すものであることをかたく信ずるが故にである。

I 生まれてきてすみません

このとし、7月15日、コロニーには初めてという実習参加の希望者数名とともに、昨年の体験者をもまじえて、こぼと学園、養楽荘、はるひ台学園と一巡し、文字どおりの見学を終えた。

「大観光団と一緒にになった私たちは、いわば少人数の観光団といった感じで、実際に中を見学する以前は、いく分遠足にきたような楽しさを感じ」つつ、まさしく「ポケットに手をつこんだまま眺めている、いわゆる外来者」（柳沢）にすぎなかったり、「見学に来てはじめて、コロニーの規模の大きさと、その環境の良好なこと」に驚き、「愛知県にこんな施設があったのかと少々誇りに感じたりした」（山本）、この初めての参加者たちは、自分がかつて偶然、路傍で遭遇した経験の中で、これらの障害者たちに、「同情はもちろん、偽善をも否定したまったく生理的な嫌悪感」（館林）すらをも抱き

ながら、一方「メクラ・蛇におじず」（山本・柴田）的心境で、多少の不安と好奇心との交錯の中で、コロニーに入りこんだ第一印象をそれぞれ語っている。「この実習による経験がないとすれば、おそらく私にとって一生、精神薄弱児、それも重度の児童とのかかわりを持つこととは無縁であったであろう。この実習に参加しようとしたのは、結局好奇心以外の何もの力によるものでもなかった」（山本）というのが、おそらく私たちの仲間にそのとき共通するものであったことはまず間違いない。

その私たちの仲間にとって、重症心身障害児施設としてのこぼと学園は、そうした中途半端な、外来者的、見学者的構えを、轟然と根底からくつがえさせた第1の鉄槌であった。

鳴瀬は率直にその思いを露呈する。「あの形容しがたい異臭、そしてぼくの実感として、薄気味悪いとしか云えないあの子どもたちの表情、これらのことが実際に見学してみて、自分の胃の腑が嘔吐感で痛み出すまでは、これから自分が“かかわって”いくという次元にまで高まっていないで、唯漠然と汚ないこともやらねばならないだろうという程の気持ちでいたぼくを根底から叩きのめした」のである。柴田もまた、この最初のであいの衝撃の大きさに、この子らととりくんでいく者としての自分の失格をまず思う。

「ただ“生きている”だけの子どもたち……。 “生ける屍”という言葉が自分の心の中で渦をまき始めたからだと思います。保母さんたちが“どうぞ抱いてあげてください”とおっしゃったとき、すなおに抱けない自分がありました。わずかながらもまだ残っている嫌悪感と“かわいそう”と思う気持ちがごっちゃになって手が出せなかったのだと思います」（館林）、「話すこともできず、自分の力でねがえりをうつことすらできず、デイ・ルームに寝たきりで、自分で呼吸することも、食事することもできず、吸入器によって、やっと生命を維持させてもらっている子どもたち、さすがにこういった子どもたちを眼のあたりにしたとき、“何故こんなにまでしてこの子たちは生きつづけなければならないか”といった率直な疑問と同時に、“何故この子たちはこんなになったのか”“予防はできないものか”という疑問を持った」（山本）。

それはまさしく生きるということのギリギリのすがたである。「この子たちにとって生とは何であるか」こう自問して子どもたちのうつろな視線に耐えられなくなった後藤がいる。「生まれてきてすみません」と彼らをして、もしいわしめたとき、その血みどろな陰惨

なすがたに眼ふさがざるを得ない後藤の思いは、「植物的存在たる精薄^{*}」このような言葉はいく度聞いたことであろう。しかし現実にこぼと学園でベッドに横たわったとき、流動食を与えられているため、管を鼻からさしこまれたまま、昏々と眠っている子どもを見たとき、決してこの子たちは植物ではないという気がした。植物であれば、これほどぼくの気持を動かすことはない」といった、彼らの中の生へのドロドロの執着にゆさぶりがかけられる鳴瀬のたゆたいと直接連なるものとなる。

こうしてギリギリの極限でただ生きぬいていく子どもたちとの有無をいわされぬであいの中から、私たちの動きが芽生えはじめる。「かねて聞き知ったあの臭いの中で子どもがゴロゴロしていた。その子どもの間を保母さんが忙しそうにたちまわっていた。だが私たちをうけいれたその声は意外に明かかった。そんな保母さんがひとりの子どもを抱えて私のところへもってきた。それまで私は、何かこわれもの^{*}にでも対するような感情でなかなか手が出なかった。そんな私を保母さんがまきこんでしまったような感じであった。子どもを抱いてゆすったり、ぶらぶら歩いてやったりすると、あの快さそうな感情が、彼の顔に認められた。それによって、ゴロゴロしているのはただ身体を動かすことができないからにすぎないのだ、とのごくあたり前のことが自分に分ってきたような気がした」（柳沢）。

柳沢のいう「大観光団」の一人で、私たちがもしあったなら、ここでのこうしたあても、その場限りのものにとどまってしまう。抱いてやるとさし出された子どもに対して、形の上でうけとめて、その子の示す快感を自分のものとたとえ瞬間的に受容はできたとしても、次の瞬間、子どもが自分の手をはなれてしまえば、自分にとってはふたたび無縁の客体となってしまう。彼自身の生きているという事実そのものへのかかわりとして転化していくことはない。所詮とおりの傍観者である。だが、私たちにはそれではすまされないものがある。このあと1月半経ち、このままでいけばともかくこの子たちの仲間とのかかわりをぬきさしならず要請させられる。私たちにとってそれはもはやよそごとではすまされない。われわれごととしてうけとめていかねばとの思いがこのような瞬間、みづからの内へと、痛く痛くつ

* フランクフルト流実存分析的立場からの人間のありかたを、身体的次元で問うとき、それは人間の植物的生に意味づけられ、心理的なものの次元を加えてもそれは動物的生として説明されうるにとどまる。真に人間存在それ自体としての人格的精神的実存はどうしても今1つの次元、精神的なもの（das Geistige）を導入することなくしては了解することができない。

きささってくるのである。

それでもなお、こうした思いは、なおわが身に直接かわる実感とまではなり得ない。養楽荘で柴田は体験する。「一人の女の人が、私の方へ歩みよってきたとは気づいたが、別に彼女の方に視線を向けることもせず、また彼女のうつろな眼が私をみていようとは思ってもみなかった。と次の瞬間、私の腕は異常なほどすごい力でつかまれていた。「キャーッ」「助けて」というのは声にはならなかったが、頭の中ではたしかにそう叫んでいたというのが正直なところ。おそろしかった。とときに身を守る姿勢をとった自分」。それを何と情ない自分と慨く柴田は、「何とかやっつけていける」といった今までの安易な気持に、ここでまたふたたびきびしい冷水をあびかけさせられる。館林もまた、「自分と同じ年頃であろうような人たちが、ヨダレを垂らし、ケラケラ笑って無心に食べものに手をつっこんでいる」姿をみて「気味が悪かった」の気持につける自分をすなおに告白する。

はるひ台の重度棟にうつって、これを実習の場と聞くとき、以上のような衝撃のあとで、私たちはいよいよほんとうにみづからわが身に問いかねばならない、ぎりぎりの決意の場に追いこまれる。実習に参加するのか、しないのか、参加することによって自分がいかなる役割を演じなければならないのか。このような思いで、障害児たちをながめてきた私たちに、いったい彼らをどのようにとらえ、彼らにどのようにはたらきかけ、そして真底かかわりあうことができるのだろうか。

それらの問いかねは決してうわべだけのものにとどまることを許さない。「生きる」ということの意味がほんとうに何か。その「生きる」という事実の中でどのようにかかわりを持ち、何を作り出していくことが可能なのか。あるいはよし一步ここでふみこむとしても、それらは結局、みづからへの合理化、自己満足にあるいは終始してしまうのではないだろうか。

こうした意識の中でのたゆたいを、戸惑いを、後藤はコロニーを一巡して、運用部へもどったあとの偽らざる思いとして露呈する。少し長きにわたるけれどもなまのままで引用しておこう。私たちの仲間の共通のこれらの思いをいみじくも吐露したものと思うが故にである。

<体験 A>

半日がかりで、コロニーを一周して、総合管理事務所へ戻ってきても何か、妙に哀しくて困った。

事前に心理学事典をひっくり返し、紀要に目を通し、覚悟はしてきても、現実のコロニーは、どうしても、やり切れない雰囲気、漂いすぎている。特に脳性マヒの子どものたちの、背中にまといつくような視線は私にとって

かなりのショックだった。「生まれてきてすみません」。私の意識の中で、陽炎のように立ち上るその言葉を、私は、その場の子どもたちの口に、一人一人移していった。そうした連想は、この場合、きわめて自然に私の内部で行なわれていったのだ。本来、この言葉はどこか「生」に対する甘えのニュアンスを含んで語られたものではあるが、もし、この場の一人でも、私たちに向って、「生まれてきてすみません」などと言ったとしたら、それはきわめて血みどろな、陰惨なものになるだろうとも想像してみた。

「脳に障害を受けているせいか、この子たちは非常に、はかない生を持っています」と園長。そうした事実自体私には、何かの救いであるようにさえ思われる。

「この子たちにとって、生とは何であるか」そう自問してみたら、子どもたちのうつろな視線に、耐えられなくなった。私の意識の中で右往左往するこの言葉。「生まれてきてすみません」。

「人は、いかに生きるべきか」中学、高校を通じて、今まで暖めてきた私の高慢なる人生観は、音をたてて崩れつつあった。生の臨界線上に置かれた者にとって、「生きる」ということ、ただそれのみが人生たり得る。

* * *

養楽荘、はるひ学園とまわって、重度の精薄に接した時にも、事態は、変わり得なかった。

「生まれてきてすみません」などという意識は、彼らの意識からは、程遠い。それは、まさに、私自身の意識の中での言葉でしかない。それにもかかわらず、私は、どうしてもこの言葉から離れることができなくなっていた。それが、いかに陳腐な響きを帯びようになっていようと、執拗にひねくりまわし、惑乱していた。「彼らは、実際何のために生きているのか」「彼らの生に何の意味があるのか」おそらくは、誰でもが一度は、ひっかかる疑問。そして、おそらくは、誰もが抜け出し得ないであろう疑問に、私もまたひっかかり、ついには、関与者である若い保母さんや、私たち自身の上にも拡がっていく。「我々は、彼らに何をなし得るのか」「何をめざして、我々は彼らにかかわれば良いのか」。〈生きる、！〉こと。これのみが人生。漠然とした生。

問題は、実に、彼ら自身の問題として、とらえらるべきではないのか。「人間存在の根源性を、かかわり手自身の問題として取り上げていく⁽²⁾」こと自体は、問題設定のすりかえであり、何ら、彼ら障害児自身の問題としての展開とはなり得ない。

“彼らの実存を彼らに代わってうたいあげる⁽³⁾”こと自体、結果的に、単なるかかわり手自身の自己満足に終始

してしまうのではないか。生を全身で体現しているというの、すくなくとも、私にとって、彼らのイメージとはなり得ていない。結局、漠然とした生。そして、行きつくところ、「彼らの生は彼ら自身のものである」。

* * *

「何のために生きるのか」このことが彼ら自身の問題として、はたして設定されることが必要であるのか。あるいは、そうした設定自体が彼らにとって、可能であるのか。

こと重度精神薄弱児の場合、後者に対する答は、きわめて否定的にならざるを得ないのだろうか。「この子どもにとって、生とは、なんなのか」問題は、停止したまま展開しない。要するにジレンマ。どうしても我々の側に立ったまま、問題の展開はなされてしまう。どうしようもない。“かかわり手自身の問題としてとらえる⁽⁴⁾”だけで、問題は終りはしないのではないかとまた思う。“この何ものにもかえられない、いわばかけがえのない、独自の世界をもつ人間存在⁽⁵⁾”としての精神薄弱児のとらえすら何となく私の中ではからまわりしている。一つには、そうしたとらえ方自体美々しすぎ、一つには、そのため、そのとらえかたがかかわり手自身の手前勝手な認知の仕方に終ってはいないのかと思ったりする。結局、かかわり手の方が主体とならざるを得ないのか。観点を変えるなら、こうした問題設定は、かかわり手が問題とすべきことではないということなのか。

ふとこんなことも思った。こうした問題意識は、私の中の差別観に裏付けられたものではないのだろうか。

* * *

私の脳ミソの中で、こんな想いがふくれあがり、堂々巡りをし、そして混乱したままで、今に至る。半日だけの経験では、どうにも仕様がなかった。今は、かえって、かかわりにおける問題を設定するためにかかわってみようという感じである。ローマを見ずして、ローマを論ずることなかれ（だったかな）。ウンチなぞは、二の次だと思っていたが、こういう気分になると、急に気になり出した。現実には、いかにかかわれば良いか、否、むしろ、良い悪いではなく、どうやってかかわるか、それが問題だ。

* * *

例の混乱した気持を持ってあましつつ、はるひ台で、彼らの食事を見ていたとき、私の目の前で食事をしていた小さな女の子が、急にスプーンを置くと、私の前まで、ちょこちょこと駆けよってきて、両手をさしのべた。私が思わずそれに応ずると、首に手をまわして、私の目を見つめて、あどけなく笑ったものだ。実に無心で、実に

<体験 B>

・第1日目——むんむんする異臭の中での、あまりおいしそうでない食事の場面が、我々と、彼らとの初対面の場であった。厳密に言えば私とケイ子との“であい”はあの見学のとき。その暗合におどろきながらも、最初はそんな状態の中で、どうしても動くキッカケのつかめない自分があった。大体、こんな臭いの中で、こんなまじいものが食えるのかなどと考え、後で、これと同じものを我々も食べるのかと思うと、うんざりした。とにかくこうした雰囲気慣れなければ、などと考えているうちに、あっちでも、こっちでも、食事を済ませた子どもたちは、デイ・ルームへ遊びに行ってしまう。それでもケイ子は、ミカンを食べただけで、食事は遅々として進まない。仕方なく、自分は、「がんばって」とか「ホラ、しっかり食べなよ」とかいろいろと、ちょっかいを出し始める。反応はすぐに帰ってきた。自分は手をとられてケイ子の隣へ座らされた。そこで、鼻歌まじりにスプーンを持たせてやったり、顔をふいたりしてやっていると、自分の首にまいたタオルをとったり、メガネをいじったり、自分の鼻歌に耳をすましたり、顔を寄せて来たりして、ケイ子の方から甘えかかってくる。そのうち、いきなりスプーンで御飯を、自分の口元へ押しつけてきた。とうとう強引に残りの食事の大半を食べさせられてしまう。

我々自身の食事から帰ると、子どもたちの入浴があった。その当番に当り、女の子ばかりの中へ、水泳パンツ一つで投げ出されて戸惑った。ドウトモナレと腹をすえて、慣れない手付きで、手近なところから洗いかかると、いつのまにかケイ子が傍に来て立っている。すでに自分を認識しているのか。これ幸いと、彼女を洗ってやって、湯舟につけて、お湯を肩にかけてやると、嬉しそうにしていた。

デイ・ルームでは、ケイ子の方から、自分の膝の上に乗って来た。体でリズムをとりながら、勝手な歌を歌っていたらケイ子の方も、一緒にリズムをとったり、「ヤンヤヤ」とか歌って結構な御気嫌。

昼間と同様、ゆっくりとした夕食を済ませると、「オチッコ」とか言われて、トイレへ連れて行かれる。そこで、歌など歌いながら一時間余りケイ子と一緒に過ごした事実は、後に、トイレット・ミュージック・セラピーなどと称されて語り草になったのだが、その事によって、実習期間中の自分の存在がケイ子の内で、確とした位置づけを得ることができたようにも考えられる。便器の前で、しゃがんでいる自分の足のしびれに反比例して、ケイ子は、その時点で、十分に幸福（という言葉が、この

場合許されるならば）であるように自分には認知できた。

そのトイレット・ミュージック・セラピーは、皆の散歩で中断したが、その途中でも、たびたび「オチッコ」「ウンコ」で悩まされ続けた。保母さんに話すと、「甘えてるんですよ」と言っていた。

5日間にわたる実習の中で、自分とケイ子とのかかわりが、もっとも展開したのは、この半日であった。それは、いわば、相手を十分にとらえられないままの暗中模索の動きの域を出るものではないが、ケイ子自身の、この半日は、彼女の新しい体験——新しい人間関係を展開する一つのいとぐちでなければならぬと思うし、そのための条件は十分に備えていたと考える。その後のかかわりは、かかわり方の改善という方向で行なわれたものと理解してさしつかえないであろう。

・2日目——昨日にくらべれば、比較的ケイ子の出す要求が理解できるようになってきた。ケイ子に対し、こちらから積極的に接触することは、ひかえたが、向うからはたらしかけだけでも、かなりあったと認められる。二人の間は、もっぱら、歌でつながれていると思っていたが、散歩の時をキッカケに、そうでもないと思うようになった。ケイ子は時々、地べたに寝っ転がって強烈なだだをこねる。自分も、同じように寝っ転がって、なだめたり、すかしたり、歌ったりする。彼女が、何を言わんとしているのが理解できず、ある種の混乱を呈する自分というものがそこにある。しかし、こうしてつきあってやること自体に、意味があるのだと自分に言いよらせる。

・3日目——前日の努力のせいか、デイ・ルームへ入るとすぐにケイ子は、自分を見つけて寄って来た。抱き上げて、スチームの上に座ると、ケイ子は、手を、自分の唇に持って来て、「ヘイライディ」を歌えとの御要望。「ズンガリ」「小樽の女」「オチンチンの歌」「昭和ブルース」「サントリービール・コマーシャルソング」「オール・ザ・ワールド」などが、気に入っている様子。後でまた三十分ほど、トイレット・ミュージック・セラピー。掃除のオバサンをして、「ケイ子ちゃん、幸せだね」と言わせる程、最初は御気嫌だったが、とうとう、また、その場にひっくり返って、泣き叫ぶ。しばらくはまったく手に負えず、頃あいを見て「ヘイライディ」を口ずさんでやると、ピタリと泣き止むケイ子。

・4日目——ケイ子と一緒にいる時はできるだけ歌ってやるように努めたためか、トイレの時間は、2～3分と、まず人並程度になって来た。ただ、出る時に、必ず「オチャ」と言って、休養室まで、自分を連れて行く。

ディ・ルームでの遊びでは、抱き上げて振りまわすようしつこく要求してくるようになった。疲労こんぱいして、自分が逃げ出すと、他の人の所へ行って要求するが、どうも通じないらしくて、仕方なく一人で遊んでいる。ときどき、他の実習生、職員の方を渡り歩いているが、不思議と最後には、自分のところへ来る。すくなくとも、「オチャッコ」と言う時は、必ず自分のところへきて訴える。

・5日目——午前中は外で、ブランコに乗って遊んだ。ケイ子は、ブランコに一度乗ると、なかなか降りようとしない。自分の膝の上に、しっかりとしがみついている。他児が、一緒に自分の膝の上に乗ると、強烈に押しつけてしまう。シットかな。

別れぎわに、また「オチャッコ」、ケイ子が「オチャ」と言ったところで、お別れの会に呼ばれたため、自分はそのままおぼり出して、帰るようなカッコウになってしまった。〈後藤秀二〉

ケイ子と一しょにいるときに、この子自身がほんとうにたのしんでいるとながめる後藤がいる。自分がたとえ、一時間にわたるトイレット・ミュージック・セラピーで、あるいは際限のない「ふりまわし」の要求に、どんなにうんざりさせられても、ケイ子自身がたのしんでいるのを見ていると、自分もまたうれしくなってきた。

これはまさしく共感によって支えられる人間関係である。上田の指摘する、共感がよって成り立つ4つの側面のうち、「同一化」「とり入れ」「共鳴」の側面はここに顕著に示される。自己が他人のうちに没入し、他人の喜びがそのまま自己の喜びと感じられること、さらに他人の経験を自己のものとしてとり入れ、体験していくこと、そしてこれをとおして、自己と他者とがともぶれし、共鳴しあうことが可能となる。他者として自己の外なる存在が自己の内なるものとして、「心の琴線にふれる」体験と深まっていく過程、最初の“であい”が啓示的であっただけに、この深まりの過程は、いかにも自然の流れとして私たち仲間の中にも、この体験を共有のものと分かちあうことのできる基盤をもつ。

あの養楽荘で「助けて」と声にならない声を発しながら、ただただ防衛的にのみならざるを得なかった柴田は、「私に対しては、しらじらしい顔しかみせてくれない“心身障害児との心のふれあい”などという大問題にとりくんでやろうという意気込みがあるわけでもなく」、ただとにかくこの実習に参加してきたのだけれど、彼女のいう「ままっ子」コウメイちゃんとの“であい”を契機に、自分でもおどろくほどにこの子たちの世界へひき

ずりこまれていく。先入観とかなりちがった“であい”の場でのコウメイちゃんのイメージ、今までの枠組はふっとびながらも、なお外からながめるままで、入りこめない柴田である。それが2日目、3日目、はたらきかけが積極的になるにつれ、ただただ一途にのめりこんでいく。かわいくって、かわいくって。この子とかかわっていることが、たのしくって、たのしくって仕方のない柴田がいる。かかわりの期間中、その日その日の、コウメイちゃんとの体験をなまの形で露呈した、柴田自身、のめりこんでいく“かかわり”の過程を、これまた長きにわたるけれども、そのまま日を追ってながめてみることにしよう。

〈体験 C〉

・第1日目

コウメイちゃん、9才8ヶ月。彼について、私が今日の“であい”までに想像したこと——それは、今になって考えると“コッケイ”ともいえる。前もって手わたされた保母さんからの「一年のまとめ」の中、「トイレの水でよく遊ぶ」「便こねをして遊ぶ」の二項で、もう私の、彼に対するイメージはできてしまっていた。昼食中の部屋で、おそるおそる彼の姿をさがした時の心中は、今あらためて述べるまでもないことと思う。

ところが、小柄な、ジロリと上目づかいで私の顔をみた彼、そして、特にその目、じっとみつめていると、なんともいえないかわいさがある……。私が描いてきた彼についてのイメージは、またたくまにふっとんでしまった。トイレの便器中の水をさわってその手を口にもっていき、との要注意の癖も、最初一回はおさえそこねてしまったが、その一回きり。必死に両手をおさえ、私をみてくれるともくれないとも、けんとうつけかねるその目を、じっとみつめてにらむと、どうやらくいとめることができた。便だって、「便こね」どころか、最初、トイレに彼が行くのを、「例の水あそび」とまちがえて、私がうっかり失敗させてしまうところだったのに、何回もまだよく彼のうたえを理解できないニブイ私に教えてくれ、万事うまくいったというわけだった。

とはいうものの、ほかの子どもたちとのかかわりは皆無にひとしく、私の手をひっぱってくれることはあるが、それが、私という一個人の存在を認めた上でのものであるとはいいがたい。したがって、今後“彼の世界”に、私がどう、どこまではいりこんでいき、彼との“かかわり”をもてるようになるかは、大きな、大きな問題である。また、正直なところ、今日半日、あそこでたくさんの精神薄弱児たちとすどす間、ひとときたりとも、「この子らの生きる意味は何だろう」「生きていて

何になる」との疑惑から解放され得なかった私である。まだまだダメだなあ—と思う。が、とにかく「サイは投げられた」4日間、精いっぱいがんばろう。

・2日目

朝、デイ・ルームには行っていった。コウメイちゃんの姿がみえない。「また“あそこ”だな」と思い、行ってみる。案の定“あそこ”にコウメイちゃんはいた。庭の一隅。破れた網戸がたてかけてあり、雑巾をほした台がおいてある狭い一角。そこで、両の手で砂をかきあつめては「フー」と息をふきかけてほこりをたてている。そしてその手をなめたり、みつめたり。「サァー。コウメイちゃん、手を洗おうッ」と言って水道の所までつれていくと、自分でコックをひねり、いつものように、ていねいに手をこすりあわせて洗う。

朝の食事の席につれていくと、ちゃんと自分の席に自分でつく。おみそ汁をご飯にかけてやると、きれいにたいらげた。食後、デイ・ルームで寝っ転び、足を組んで体をゆすっているコウメイちゃんをおいて、ほかの甘えてよってくる子どもたちとジャレあっていると、ショッキングな場面が私の目にとびこんできた。今まで、デイ・ルームではねころんでいるしかないコウメイちゃんが「キャー、キャー」と嬉しそうなヒメイ(?)をあげて、沼尾さんの首に両腕をまきつけ体をのけぞらせたり、だきついたりしている。「肌と肌のふれあい」なんだ。そうだ。私は心でこうくり返した。コウメイちゃんをだきあげる。顔を腕の中におしつけてくる。とすぐ身をのけぞらす。そりかえっている彼の体を、横にふってやると、たのしそうに声をあげて笑う。うれしかった。コウメイちゃんが自分から私の胸に顔や体をおしつけてくるなんて……。ほんとうに嬉しかった。

昼食後、彼に手をひかれるまま、まずトイレへ。用をたすと今度はふとんの敷いてある部屋につれていかれた。まどぎわのふとんの上に寝っ転べといわんばかりに体を横におさえつけられる。すなおに従った。と、隣のふとんの上にひろげてあるシーツらしいものをかぶせてくれ、両手でひっぱってきれいにのぼしてくれた。くすぐったいやら嬉しいやら。コウメイちゃんみづからも隣に寝っ転がり、体を右へ左へとゆする。ときどき、彼の顔がほんの近くにくる。目と目がバッチとであった。彼は顔をクシャクシャにして笑ってくれた。「コウメイちゃん」と二、三度呼んでみた。返事なのか、ただの発声なのか「アイ、アイ」と言った。

きのうとは、だいぶちがった、みたされた（私の自己満足？）彼との一日だった。

・3日目（略）

・4日目

朝礼が始まった。私たちがあがるとコウメイちゃんもたって、まわりをぶらぶら歩きまわり、すみの方の紙の切れはしのおちている所にしゃがみこんでしまった。ほかの子どもたちは、名前を呼ばれると返事をしたり、手をあげたり、手をたたいたり。そんな彼らにはまったく無関心なコウメイちゃん。彼の名がよばれた。手をひっぱってきて「コウメイちゃん、アイって言って」と手をあげさせるが、横をむいて全然反応なし。私と二人で遊んでいるとき「アイ、アイ」といっているのに。やっぱり、ほかの子どもたちや保母さんとのかかわりあいは皆無にひとしい。歌をうたおうが、手をたたこうが、集団なんてものは、徹底的に無視している。彼とジャレあっている時、あるいはまた、外に出ていっしょに遊ぶ時、トイレや北棟などに手をひっぱって行く時、声を出し、笑い、怒るコウメイちゃんをみて、何か彼との間に通じているものを感じていた私だったが——。「かかわり」にほんのすこし近づけたような気持になっていた私だったが、またしても「ダメだァー、どうしたらコウメイちゃんに私を一人の人間として認めてもらえるんだろう」と考えこんでしまった。彼がいつも私の手をひいていくのは、ただ、彼のそばに私の手があるから——。なければならないで、どうってことはないのだ。外に出る時、戸があるからそれをあけて出る。食事のとき、スプーンがそこにおいてあるからそれを使う。それとまったく変りないんじゃないのか。彼の隣に偶然私の膝があったから、その膝にのぼる。別に「私に甘えてみたい」なんていう気持はなかったんだ。ときどき、一緒に遊んでいて目があうことがある。顔中で笑うこともあれば、カッと目を大きく見開いて、私の顔をのぞきこむこともある。そうした彼の行動は、彼が水やらドロやらをベタベタたいておいて、自分のよごれた手をみつめている——あれと何ら変りはないんだろうか。わからない——。ほんとうに彼がわからない。今まで一人で喜こんでいた自分がみじめでならなかった——。

私とコウメイちゃんとは、確かにこの4日間一緒に遊び、食事した。トイレにだっぴつもついでいった。はたして、これでよかったか。私は子どもを溺愛してしまう方だが、またしても……。今日までののは、みな私一人“ネコカワイガリ”して喜こんでいたんじゃないのか。「コウメイちゃんがかわいい」ただそれだけに終ってしまい、今後どう彼を導いていくのか、彼の中のかくれた可能性をどうみつけ出し、ひっぱり出し、その一点を大きくひろげていくか、などについて考えていたのか。それらを考えた上で、彼とともに遊び、食事し、排泄につ

きあったのか。私はこれらを考え、コウメイちゃんから今、すこし離れてみようと考えた。私のいないところでどうするのか。手を出しすぎ、世話をやきすぎでいた自分は、今日までにどんな悪影響を彼におよぼしてしまったか、そのときからなるべく離れて、ほかの子どもたちと遊びつつ、またほかの子どもたちと比較しつつ、彼をながめるよう努めた。ときどきそばへ行って、コウメイちゃんに手をひっぱってもらいたくなる自分をおさえつつ。

・5日目

コウメイちゃんは、食事のとき、おらずに鼻をくっつけ、まずニオイをかぐ。それからたべ始める。今日またしてもお昼はミルクとパン。彼は先日、ロールパンをおいしそうに食べたのに、今日のスライスは全然うけつけようとしな。味も先日とちがうわけでもなし、ただ形がちがうだけなのに。ミルクはいつもどおりキョゼツ。なんとしても食べさせようががんばったが、口までもっていくと手にとりすててしまう。30分ぐらいパンを前に彼と根くらべ。とうとう負けたのは私だった。ニックキパンから解放されると、また私の手をとる。北棟へつれていこうとするのだ。サッと彼の手をぬけてデイ・ルームの方へ逃げると、あとをおっかけてきて、「ウー、ウー」と怒り、手をひっぱってつれていく。こんどは廊下に寝っ転んでコウメイちゃんに抵抗する。手を取り、必死に私を起こそうとひっぱる。「アウー、ウー」と声を出し、顔をゆがめて怒る。なんとしても私を北棟へつれていくつもりらしい。10分程またまた根くらべをつづけたが、この場合も私が負けてしまった。

もう、そろそろ別れる時間も来た。最後だなあと思いつつ、彼の外に出してくれとの欲求には素直に従ってやった。竹棒の上のり、綱につかまり、私の両手を腰にあてがって支えさせておいて、上キゲンで身をゆすっている。彼は足を、とても器用に動かす。足、足の指がおどろくほど機敏に動くのだ。ほんとうに楽しそうに声をあげ、顔中笑いでいっぱいのコウメイちゃん。こうして彼の好きなことをさせて喜ばしておく——これがコウメイちゃんにとっての幸せなんだろうか。身が危険にさらされぬよう注意しつつ、彼の欲するがまま、思う存分遊ばせてやる。こうすることが彼をいい方向に伸ばしてやることなのか。あまりにも楽しそうに遊んでいる彼を支えつつ考えてみたが、よくわからなかった。コウメイちゃんにとっての幸せとはなんだろう。一般の社会で、一般の人々と同じように、一定の、いわゆる「常識」と名づけられたしつけをほどこされて、社会生活を営んでいけるようになることが、コウメイちゃんにとっての

ほんとうの幸せなんだろうか。片手をしばりつけられ、もう一方の手でスプーンをつかって食事する——いや、させられる彼、スプーンを上手に使い、こぼさないよう“お行儀よく”食事できるようになることは、ほんとうに、コウメイちゃんにとって“彼の進歩”というのだろうか——。わからない。考えれば考える程わからない。心からの笑いと呼べるような笑顔のコウメイちゃんをみていると、「重度精神薄弱児」などという重苦しい言葉が、大層しらしらしいものに感ぜられた。〈柴田裕子〉

コウメイちゃんとのかかわりの体験における、柴田の内なる動きへといった変容のもたらす意味は大きい。ただ一すじにコウメイちゃんかわいさの故に、ひとりよがりとみられても仕方のないほどのめりこんでいきながら、4日目あたりに、一つの壁にぶつかって、自分の一方的にのめりこんでいくその傾斜をおさえたいこうとする動きをみづから認めている。上田のいう共感⁽⁵⁾というはたらきの今ひとつの側面、「分離」がここに示される。単に相手かたの情緒にまきこまれてしまうというだけでは、正しい認識も客観もない。私たちが共感的なかわりを意識化し、言語化して、公共のものたらしめようとするときには、ときとしてこの種の、すこし離れて対象をながめ、自分の情緒のまきこまれていくあり方を内省する余裕が必要となる。そのたしかめが、ときには主観的とも批判されうるこの種のアプローチを、主体的なアプローチにまで高めていく機運ともなりうるものではあるまいか。

この段階をつきぬけること、そこにかかわり手の成長を認めたい。強い同一化を志向しながらも、常にかかわる相手を、それ自身、自己の本質を失うことない、かけがえのない一人の人格として認め、その人の現に生きるという事実に対して、心からの尊重を払うことを忘れることのない、かかわり手の側のゆとりをもった心のゆたかさが、ここに要請されるのである。

もちろん、かかわりの体験としては、このようにして深まりいくもののみを期待することは不可能である。ヤスオとの最初の“であい”においてのあるこだわりがひとつのしこりとなって、実習を終える最後までずっと尾をひいて、義務感から、対象児をみる視点をとうとう抜けきることができず、悩みつづけた鳴瀬がいる。この鳴瀬の体験は、またそれなりに、体験を内面化し、“内なるもの”として深化していくことがいかに困難なものであるかということを示す。“ながめ”の座に留まったまま、内面化への志向性に苦しむ鳴瀬の、今度は序報で報告された体験の記録様式に準じて語られたなまの

声をまた聞くことにしよう。

<体験 D>

(1) 知能は遅れていても、運動神経が発達し、多動な“わんぱく小僧”といった担当の対象児に対して私が持っていたイメージは、最初の“であい”でももの見事にこなみじんにされた。鼻梁を除いて顔面一杯に拡がっている赤アザ、その一件が強い印象を持って私に迫ってきた。そんな気持ちで見たヤスオは、眼つきまで何か陰湿な感じがするのであった。しかし、食事の介助をしているうちに、そのような印象も段々薄らいできて、ときおり、彼の眼の中に喜びの色が浮ぶのを見ることが出来たと思うようになっていた。とはいえ食べるのを拒否された時には、彼に嫌われはしないかという恐怖で一杯であった。その恐れも、しばらくして、保母さんの介助の仕方を見ているうちに、自分にも、あの程度の無理やりに食べさせるだけのことならできるんだ、という気持ちを持てるようになり、徐々に弱くなってはいった。

でもその後、半日、何となく対象児とのかかわりがうまく持てなく、彼を遠まきに眺めているだけであった。

(2) 2日目も前日同様、ヤスオにうまく入り込めなかった。ほかの子どもたちとはあまり抵抗もなくかかわっていけるのに、彼に関しては、何かしら、自分こそがやらなくてはという義務感が強くてもうまくいかない。とにかく、自分が彼の関与者なのだから、彼とかがかわっていくことは私の義務なのだからというような気持ちがいつも脳裏にある。行動に自然さが欠けて萎縮してしまう。

2日目の夜、保母さんたちとの話し合いの中での「ヤスオは甘えてくることが多い」という言葉が、私の脳に重くのしかかってくる。私が近づいていけば避けようとする様子を見せる彼。まさに私は彼にとって不適格な人間、望まれない人間なのだという気持ちが強まっていく。朝食の後、ヤスオが吐いたことを保母さんから聞かされて、ますます困難な状況を予測せざるを得ない。彼の動きをただ遠くから眺めているばかりであった。ただそんな状況の中でも、ほかの子どもの手を引いたりしているときには、この恵まれない子どもたちの慈父のような気持ちに侵ることができ、それが唯一の慰めであった。

(3) ヤスオとの関係はあいかわらずであり、彼の存在が私の存在をおびやかすまでになっている。(彼がいる限り、私の義務は消えないのであり、私はそれにどう答えてよいのかわからない。)

御飯を、無理やり口の中へ押し込んで食べさせている自分、とにかくヤスオが御飯を全部食べてくれれば、自分の義務は終るんだという、ひたすら安らぎの場を求め

ようとしている私。彼が吐きそうになり、目に涙を一杯溜めていても、食べさせなくてはという義務感に縛られたままだいる。そんな中でも、彼が私の膝の上で笑ってくれたときには、彼以上に私が嬉しかったこともたしかである。(しかし一方では、彼は本当に喜こんでいるのか疑ってモいた。)

しかし、子どもたちの中へもぐり込んで3日目となり、徐々に子どもたちとの接し方にも、自然さが身についてきた現在、“何のために、何のために子どもたちと接していかなくてはならないのか、それがどんな意味を持つというのか”という疑問が、ふたたびもち上がってきた。そして、5日間という短い期間のかかわりが、この子どもたちにとっていかなる意味を持つことになるのかなど、疑惑が次から次へと浮んできてどうしようもない。ヤスオにとって、たとえ5日間という短い間であれ、私がここにいることは迷惑なことであれ、決して喜ばしいことではないのでは——。もしそうだとしたら私は何のためにいつまでもここにいるのだろうか。なぜいる必要があるのだろうか——。体の方は相変わらず動きまわっていても、胸の中はますます空虚になっていくばかりであった。

(4) そんな気持ちでいる私はいよいよ居たたまれなく、今すぐにでも逃げ出したかった。しかし、私には子どもたちとかがかわっていくという義務がある。それにみんなの手前、逃げ出すなどということもできない。今までも何とかやってきたのだから、これからもどうにかなるさと思わざるを得ない。また、疲労も重なってきて、動くのさえいやになってくる。しばしば、デイ・ルームを逃げ出して(子どもたちから逃げ出して)、煙草をふかしていた。この頃にはヤスオに対するはたらきかけもほとんどなくなっていた。彼が一人でデイ・ルームの中を駆けまわっているのを遠くから眺めている。それもごくわずかな時間であり、ほかの子どもたちと遊ぶことで自分の心を慰めていることの方が多かった。

ときおり思い出したように、彼に近づいてみたりするものの、彼が避ける様子をすれば逃げてきてしまう私。ただただ、彼からホンの一握りでよいから、私に興味を示してほしい、彼にとって私は特別の人間、望ましい人間なのだとして欲しいという祈るような気持ちであった。

ついには、昼寝の時間を利用して、無理やりに、彼をかかえ込んで寝てしまった私。こういう強引なやり方でも、一応彼の“かかわり”を持つという、私の義務は遂行されたんだという一種の安心感を持ちながら。

(5) とにかく最後まで彼の中へ入り込めずに、むしろ避

けようとしていた。彼の小さな世界が私にはとらえられない茫漠たるものとして映っていた。そして彼に申しわけない気持ちと、何もできなかったという後めたさで過ぎてきた5日間、またもや“何のために、何のために子どもたちとかかわるのか”という振り出し以前の問題に直面せざるを得ない。最後に一言、“ヤスオくん、ご免ね”。〈鳴瀬和秀〉

ヤスオ自身はたしかにほうっておいても動く子である。この子にこちらがはたらきかけることによって、かえてこの子の自由を抑制することになるのではないだろうか。自分の存在が、自分のかかわりが、この子にとってむしろマイナスですらありそうだという後めたさが、鳴瀬を罪障感にも似た思いにおちいらせ、安らぎを逃避の世界に求める行動へと誘いかける。

柳沢におけるナオくんとの取り組みもまた、その展開の過程においてこれに近い。“とらえ”においても“はたらき”においても、迫ろうとすればするほど、ナオくんは遠いところにいる。ナオくんには言葉がある。しかもいく分の言語障害を伴って。その障害をもった言葉が、かえて柳沢をして、徹底的にナオくんに入し、ナオくんの経験を自己のものとしてとりいれ、共感的に体験することを妨げてきたとまた云えないだろうか。「ボクのセンセイ」と自分をさがしていたと聞いて、なお、それは自分のことではないのではないかと疑う柳沢がいる。「ナオくんから何かいってきたときだけかわるといって、消極的、受身的、強いていえば逃避的な態度をとるようになってしまった」柳沢にとって、“内なるもの”としてのナオくんの位置づけは、所詮遠いものとならざるを得ない。

鳴瀬、柳沢の体験にくらべれば、それほど遠い距離ではないにしても、ハメちゃんと取り組む館林、ヤスフミとの関係における山本の、体験の内的過程の変容のありかたにも、“かかわり”の深まりといった点で十分でないことをまたともにみづから認めている。

自閉症的傾向の強いヤスフミとの“であい”において、「ああ、楽な子にあたったようだな」と一応安堵はしたものの、最初の“であい”で、その食事の仕方をながめて嫌悪感をもち、心のふれあいなどとてもできそうにもないと感じる自分への自己嫌悪が強まるのを恐れつつも、何とかして追いかけてまわそうとした空しい山本の体験である。4日目の午後あたりから身体的接触をとおしての、ヤスフミからの“はたらき”に、何かしらこの子との“かかわり”に変化がみられたと感じながらも、またこうしてはたらきかけてくるヤスフミに、この子がきてくれたんだなという喜びはあっても、何か知的

な割りきり方に終始して、情緒的な通いあうもの、一体感として共感にまで高まるものを感じえないで、その場にただいたずらに低徊する山本がいる。

くっついてきてくれればうれしいのに。しかしいつでも男の人の方ばかりへ動いていくハメちゃん。「担当者だという責任感からのあせり」を覚えながらも、動きの中でのからまわりだけが目立ち、常にむなしさからのがれることができないまま、いつのまにか、動きのある、ほかの子どもにはたらきかけ、それとかかわっている館林。最後の日、別れの前に、自分のそばへ寄ってきて、膝の上にのっかかってくれたこと、そのとき始めて、ハメちゃんとかかわれるんだなといった気持ちが芽生えてきたようだとほうすら感じつつ、実習が5日間ではなく10日間もつづいていたならもう少し、そこから抜け出すことができたんだろうと夢思しながらも、結局ハメちゃんをわかり得なかった、ハメちゃんに私がわかってもらえなかったとの思いを抱いて、ハメちゃんと別れてきた館林。

“であい”から“かかわり”へ。私たちの新しい仲間のこうして今年また、それぞれの対象児たちと持ちえたかかわりの体験は、まさしく多様であった。昨年同様、かかわり手の構え、対象児のありかたによって、その体験の変容の様相はさまざまではあるものの、それなりに2、3のパターンとして括ってみることも可能であろう。共通する体験様式としてまとめようとの試みは、すでに昨年の序報においてなされている。今回はそれらのパターンをこうしてまとめていく方向をとるよりも、そうした異なる体験様式が、具体的に実習を終えたあと、参加した仲間それぞれの、障害児をとらえる視点における自己変革へ向けて、どのように作用したかに焦点をあてようとする。「探索の学」をこえて「問いかけの学」へとといった展開は、この種の“ながめ”から“かかわり”への過程における体験のありかたのパターンによって、異なった様相を示すものであろうか、それともそのパターンはたとえ異なるろうとも、こうした体験をともかく内的体験として省察する機会をもったこと、つまりそうしたかかわりの体験を体験したことそれ自体、そうした展開の基本的志向に同調するものとなるのであろうか。私たちの今回の報告における主題はそこにある。

Ⅲ 私自身の“内なるもの”

＜体験 E＞

この実習に入る前、コロニーを見学して受けた印象、“精神薄弱児は、私以上に人間というものの存在を強く訴えかけている”には多少の誇張はあれ、そうであった

と思う。しかし現在、5日間の短い体験をとおして、その印象について考えてみると、障害児を自分からある距離を置いて眺めていたのでは——、私はあくまでも正常な人間であり、彼らのような欠陥を持った人間ではない。だからこそ彼らの欠陥が、正常な人間への仲間入りを妨げている彼らの欠陥こそが、正常な人間への仲間入りを求めている叫びそのものであり、人間というものの存在を強く訴えかけてくるのでは、というような意識ははたらいていたような気がしてならない。

今すなおに気持ちを吐露すれば、もはや、そのような気持ちを持つことが不可能となっている私がある。たとえ短い5日間であったにしても、私なりに彼ら障害児と生活をともにしてきた以上、もはや彼らは私にとって別種の人間ではあり得ない。彼らが奏でるメロデーに私がオブリガートしたという気持ちではあっても、決して不協和音を残してきたとは思いたくないのかも。とにかく、私の意識の中では、彼らも、私の生活場面と同じ次元に置かれることになったと思う。

今度の実習を通して、“かかわる”（私が真にこのことを実践できたかどうかは判然としないが）ことは、かかわっていく者自身を大きく変化させるものであるという気が強い。〈鳴瀬和秀〉

〈体験 F〉

体験を通じて、私の中で大きく変化したのはやはり何といっても障害児観である。見学に行った時点でも、それは観念的、あるいは感性的な域から出ていなかったように思う。むしろ、わずか5日間の実習期間でそれほど深められるわけではないのだが、それでも実習以前と比較すれば、障害児たちと直接、肌でふれあうことができたことで、実存そのもの、生活空間を共にする存在という認識が私の中に生じたように思う。

すくなくとも、彼らを“生ける屍”とみなすことはなくなった。彼らの将来が決して明るいものとは思わないうまでも、生きている意味のない、死んだほうがましな存在であるという認識は消失した。彼らはたしかに生きていたからである。喜怒哀楽すべての感情を示し、私に訴えかけ、私を拒否し、彼らなりに学習し、適応していた。彼らに対する生理的な嫌悪感を感ずる場面もあったが、それも克服できることが多く、たえられないものではなくなってきた。そうなると、こちらの（私の）側からの、彼らに対する働きかけも何らとまどいを感じることなくできる場合が増加してくるようになった。私に限っていえば、彼らに対する私の心理状態がそのまま彼らからの反応となって返ってきたということができるよう思う。“担当ケースだ”という固執は最後まであっ

たが、その中でも嫌悪感は愛着へと変化していくのを感じた。〈山本秀人〉

〈体験 G〉

今、さまざまな反省と、悔恨がよぎっているが、それを逐一書こうとは思わない。むしろ、障害児観の変容に、自分自身、注目したい気持ちである。

自分のかかわったケイ子は、いわゆる“張りのある相手”であった。つまり、外面的に、そしておそらく内面的にも、反応性の高い子であった。そのためもあって、ケイ子と自分との間には、一対一の人間関係が存在していたと思わせるに十分なものがあつた。それは、自分が“普通の”子どもとの間に作り得る友達関係のようなものと基本的には違っていないように思う。自分の場合、そのような認識は、コロニーを去るに際して「精神薄弱児とかかわったのだ」という強い感慨の入り込む余地をすくなくしていたようにも思われる。

今、考えてみれば、「何のために障害児たちは生きているのか」という疑問は、一面のナンセンスである。もっとも基本的には「生きることを知るために、人は、生きる権利と義務を持つ」のではないのか。彼ら障害児の生を、こちらから全面的・一方的に許容することは、自分自身の人生に対しても許容的になってしまうことにつながる——という発想が、当初のジレンマにつながっていた。このこと自体、現在でも、ジレンマであることに変わりはない。ただ、この際、ことさらに彼らが〈障害児〉なのだという観念を持つような態度は避けねばならないと思う。それは、おそらく、彼らとの間に、何らかの形で同胞を意識した者でなくては、かなわぬことではないかと、今にしてまた思う。我々にとって、対人関係の拡がり、パーソナリティ形成——云いかえれば自己実現の上で有益であるのと同じように、彼らにとっても我々と接したことが、それと同一次元での出来事ではなくて何であろうか。自分自身が、5日間のかかわりの中で変化したように、相手にも、おそらく変化が期待できよう。（両者は必ずしも、同一に論ずることはできないだろうが）それが、ある意味で生きるということではないか。

ただ、このまま論を進めることは、少々危険であるようにも思う。やはり、障害児故に存在する種々の問題は、厳としてそこにある。あるいは、どうしても他者の介入を許さない者もいる。他者とかかわるポテンシャルティすら有しない者もある。そんな彼らも、彼らなりに独自の世界——つまり自己実現と広く呼ぶところのものを展開すべきであろうと考える。それは、多分、机上の空論に終わってしまうことも多いであろうが、現在は、た

だそう思う。〈生きる〉ということが、自分にとってきわめて漠然とした割り切れないものである。そこに戸惑いがなくてはならぬと思う。すくなくとも、他人の人生までも、割り切ってしまうことは、断固すべきではないとみづから戒しめるところがある。あくまで「彼の生は彼自身のものである」との立場を（傍観者の意味ではなくて）つらぬくしかないのではないか。〈後藤秀二〉

＜体験 H＞

（前略）……考えてみると、私とコウメイちゃんとの間に、“とらえ”の時期はなかったようである。とにかく、初めてコウメイちゃんに会い、母性愛的なものを感じて、一方的に、まさに一方的にはたらきかけた。私からコウメイちゃんへの動きはあったが、彼からの動きはなかったように思う。もちろん私への彼の欲求はあったが、それは彼の内なる感情の動きとむすびついていたものであったか否か。彼と“かかわり”を持つ段階には、いたらなかった。どうしたら、私はどう動けば、コウメイちゃんとの間に“かかわり”の関係がもてるのか。この事を考え、悩み、悲観しているうちに、5日間の実習は終わってしまった。

そして今、10月初旬、あれから1ヶ月以上たった。今も、コウメイちゃんへの情はかわらない。が、今の私の生活とコウメイちゃんのコロニーでの生活とは、なんら結びつけるものもなく、あるのはただ“へだたり”——いろんな意味での“へだたり”のみ。ときどき時計をみつつ、今は——をしているところだ。今ごろは、もうお食事かなあ。またデイ・ルームの例の“ナワバリ”で例のスタイルをして、手を見つめたり、なめたりしてるかなあと思う。今私にできること、とはこんなことなのか。ちがう。決してそうではない。もがきつつ、悩みつつ、何度も試行錯誤をくり返しつつも、精神薄弱児の心の中に入って行く方向へと進まねば。実習では、肌と肌のふれあいであっても、心と心のふれあいはなかった。が、いつか、精神薄弱児の“魂への道”をみつけ出したい。誰のために。いうまでもなく、私自身の“内なるもの”のために。

コロニー見学の際も、実習が始まってからも、重度精神薄弱児の生きる意味、彼らにとって生きるとは何か、ということが、まったくつかめない私であったが、実習を終えて1ヶ月以上たった今、やっと私なりに心の底からうなずけるものをつかめたように思う。精神薄弱児たちのうつろなひとみの中に、ときとしてキラリと輝くもの——それが私に“生きる”ということの深い意味を教えてくれた。〈柴田裕子〉

5日間の実習を終えた。さまざまの思いを抱いて、はるひ台をおり、この実習をいま静かに省みる私たちの仲間がいる。

その表現はさまざまである。しかし程度の差こそあれ、障害児をとらえる視点の変容に、期せずしておどろくその声は共通する。

程度の差こそあれとのべた。その差はやはり“であい”から“かかわり”への深化の過程と決して無縁ではない。最後までかかわりきれなかったナオくんとの間に、遠い距たりを意識せざるを得なかった柳沢は、「実習という状況の中で、変化する自分を考えていたのだが、彼らとの間にやはり一線が、私の構えとして無意識的にもひかれていたのではないかと感じ」ざるを得ない。その一面、同じところで、「しかし私たちとくらべて、なんと素直で自由な感情表現をするのであろうか」と述べ懐しながら、「同時に私の方も、誘い出された赤裸々な笑い、甘えを受容する、相手の思いやりをありがたく分るといった」体験をもつ。厳然として変らない私と、いま動揺する私とがいる。同じ柳沢の中に。そしてそれはまさしくこのかかわりの体験を体験することによってはじめて得られたものである。

たしかに子どもの側に張りあいのある子どもと、ない子どもといった違いはある。動きのあるなしが、張りあいのあるなしと関連しよう。そしてそのような関連は、当然こうした体験における深化の過程に作用する。張りあいのない子としてとらえたとき動きはないし、動きがないからこそ、また張りあいも感じられなくなってくる。その悪循環をいたずらにくり返すとき、子どもとの“かかわり”は結局むなしくからまわりするのみで、所詮深まるものとはなり得ない。そしてそのとき、厳然として変らない私があることに気づかされる。何が私をして変えさせないのか。そう動揺する私の傍に無心で純粋な子どもは、それこそ自由な感情表現のままに立つ。ただそれだけが、ふたたび私を動かし、その動きの中で、あらためて張りあいを感じながらに、深化していく過程を期待させる源となる。かかわりの体験がはじめてもたらず、障害児のとらえの変容であり、みづからの変革への端緒であるといってよい。“であい”から“かかわり”への体験において、深化の困難さを嘆いた鳴瀬が、しかし実習を終えて、この子らと共にすごしたということの意味をふたたび省みると、彼自身の中での変容を意識するのも、まさにこのことの裏づけとなる。80%の虚無感の中で20%の充実感に浸る館林も、そのとき彼女なりに変革の方向を意識する。

深まりをみづからの意識として実感し溺れるまでの

めりこんでいった関与者にとっては、この種の内在化の方向性は、当然より明確な位置づけをもつことになる。山本の体験から後藤、柴田の体験のニュアンスの差は、このことを明示するものともいえる。柳沢、鳴瀬より今少し“かかわり”の深まりを意識している山本にとって、障害児のとらえの内面化は、自己の変容として表現されてはいるものの、究極観念的、知的な水準にとどまってしまう。真の意味での内在化は、文字どおり全精神をあげて相手の精神に合体化させ得る共感の構造をもつものでなければならない。山本における変化の過程が内在化を志向しようとも、皮層のものにとどまる思いを捨てられないのは、この種の自他合一の体験と高まり得ていないがためと思われる。共感の方向にすすみながらも、分離の側面が強く、知的作用が影響するところ大きな体験である。こうした分離が適当な“間”をもつとき、はじめて共感的関係とよばれるにふさわしい、“かかわり”の体験が生まれてくる。後藤、柴田のケイ子、コウメイちゃんとかかわりは、こうしたただひとすじのめりこみと共に、常にまたある距離での隔たりをも失わない。「離れては審さに思い、接しては忘れて行なう」⁽⁸⁾のこころである。

このとき障害児は私にとって何であろうか。はじめてコロニーを訪れ、こぼと学園で重症の子どもたちと接したときのあの衝撃、そして衝撃が大きければ大きいほど、その折には私にとって遠い遠い“外なるもの”としてしか位置づけることのかなわなかった障害児。それらの障害児がいつどうしてという明確なおさえもないままに、いつしか私にとってもう離れることのできない存在として迫りつつあることを意識する。物理的には“へだたり”として感じつつも、肌と肌とをこえての心と心のつながりを志向する、精神薄弱児の“魂への道”をみつけ出ししていきたい思いにひたされる。「そしてそれは誰のために。いうまでもなく私自身の“内なるもの”のために」。

柴田のこの視点はこのとき私たちのすべてにとって、重く、きびしい意味をもつ。何よりもそれは障害児を知り、体験をこのような形で深めたことにもとづく柴田自身の成長である。まさしく重度精神薄弱児とどうしてかかわり、かかわったことによって教えられたのであるといってもよい。重度精神薄弱児に学ぶもの——私たちはこの種のみづからの“内なるもの”への問いかけとして深化していく過程そのものが、広く人間存在の意義をきわめて謙虚に学ぶことにつながるものであると知る。それはまさしく辻も指摘する如く、一人一人の生がまさにそれ自身のために無限に尊重されねばならないがため

あり、心身の平面に生きるにとどまらず、人間が人間でありうるためには、精神の次元をとりいれることによって始めて人間空間を構成するからにはほかならない。そしてその精神の座において、まさしく人間は生命的に現にあるという事実をこえて、その事実に対するかかわりをもちつつその事実から作り出してくるものを期待したいが故である。

本研究は名古屋大学教育学部における昭和46年度教育研究実習の一環として行なわれた。学部学生、吉田耕治、後藤秀二、柴田裕子、鳴瀬和秀、柳沢繁満、山本秀人の6名が実習生として参加し、それに昨年予備的教育研究実習に加わって、序報の共同研究者となった、大学院生、蔭山英順、加藤義男、沼尾孝平、赤塚大樹の4名と、教室非常勤職員、館林久未子、愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所の研究補助員、伊藤紀子、小塩允護もこれに加わり、実習期間中毎晩提出された、その日その日の実習体験のレポートをもとに、期間中はもとより、その前後数回にわたる研究討議の結果の一部がこの報告である。

2度目の実習経験者から成る研究グループのまとめは、別の機会に委ねられた。そのグループでは、こうしたかかわりの体験の変容を中核の課題として、重度精神薄弱児における発達の意味“変わるということ”を問いかけ、一連の報告の一部としてまとめることを企図したが、現段階ではそれにこたえるにはまだ十分でなく、さらに体験を深める必要が指摘されたからである。この報告では初めての参加者、後藤、柴田、鳴瀬、柳沢、山本、それに館林の計6名の体験記録がとりあげられ、“私の内なる障害児”への志向といった副題の線によって、筆者が考察を行なったものであり、形式的には個人研究とはなっているが、その意味で実質的には、上記6名を中心とする、実習参加者全員の共同研究であることを特記しておきたい。

なお、昨年同様、本年度の実習においても、昨年に倍する大勢の実習参加者を暖かく受け入れて下さったばかりか、期間中連夜の討議にすすんで参加していただき、私どもの視点に鋭い批判を与えて下さった、はるひ台学園重度棟阪田係長をはじめとする保母さんがたの御支援に心から深謝するとともに、障害児教育の実践の場における日ごろの御精進に深い敬意を払うものである。

さらに、こうした実習を快く許可していただい

原

著

たコロニー内関係者各位のいつに変わらぬ御配慮に
厚く感謝の意を表したい。

<昭和46年11月19日>

引用文献

- (1) 村上英治ほか：重度精神薄弱児への人間学的接近
（序報）——かかわりの体験をとおして——「名古屋
大学教育学部紀要」——教育心理学科—— 17
巻（1970） 1～19
- (2) 村上英治ほか：同上 4頁
- (3) 村上英治ほか：同上 3頁
- (4) 村上英治ほか：同上 4頁
- (5) 村上英治ほか：同上 2頁
- (6) 上田吉一：精神的に健康な人間（1969）誠信書房
327～339
- (7) 上田吉一：同上331～332
- (8) 池田太郎：施設児童の進路指導——しがらぎの実
践を中心に—— 精神薄弱児研究 108（1968）16頁
- (9) 辻 誠：心身障害児（者）における生の意味と教
育——その実存分析的考察—— 特殊教育学研究
9（1971） 1～10